bethel hospice letter autumn

ホスピスだより

tender loving care vol.28

松山ベテル病院 緩和ケア病棟
〒790−0833
松山市祝谷6丁目1229番地
TEL 089（925）5000
FAX 089（925）5599

医療法人 聖愛会
松山ベテル病院
https://www.bethel.or.jp

緩和ケア病棟では毎年行われていた様々なイベントが、コロナ禍で中止を余儀なくされてきました。しかし、それではいけない！！このコロナ禍でも患者さまに季節を感じ楽しめる企画はないかとスタッフで考え、夏祭りを開催することになりました。本来であれば、患者さまだけではなくご家族にも参加していただきたいところではありましたが、感染予防対策の観点から今回は患者さまとスタッフのみで行いました。

当日は病棟を飾り付け、患者さまにはお祭りの雰囲気を少しでも実感してもらおうと法被を着ていただき、感染予防対策に注意しながら輪投げやヨーヨー釣りなど楽しんでいただきました。そしてボランティアさんの手作りのおやつやかき氷も準備し、自室で楽しんでいただきました。久しぶりに病棟に患者さまとスタッフの笑い声が響き渡りました。患者さまが目を輝かせて楽しんでいる姿をみると、スタッフ一同嬉しく思いました。

コロナ禍で生活行動制限も多い中、非日常な時間を患者さまと楽しむことができて、素敵な夏の思い出ができました。秋には、ハロウィンパーティーも行いました。

企画運営スタッフも法被着用！！

ボランティアさん
手作りのおやつ

たくさんの笑顔に会えました♡

マスクは必要に応じて病棟で励行しています。

趣味を楽しむ～おすそわけ～

Ｊさんは病棟のガーデンで奥様と一緒にパイナップル、バナナ、メロン（品種：ころたん）、ミニトマト（品種：アイコ）、いちごを育てていました。初めはパイナップルから始まり、愛称もつけていました。「パイナップル！？バナナ！？ええ！？そんなのどうやって育てるの！？」とスタッフも興味津々でした。

パイナップルは普通だったら捨ててしまうヘタを挿して育てるという方法を教えてくださいました。そして、バナナの苗も植えて見せてくださいました。パイナップル、バナナは数年かかるということでまだまだ成長に時間がかかりそうですが…今も少しずつ成長しています。次にころたん、ミニトマト、いちごも植え、毎日観察し、水やり、肥料を与えることもＪさんの楽しみになっており、私たちスタッフの楽しみにもなっていました。雄花と雌花の話やいちごの育て方についてはご自身でスライドを作り、スタッフにも解るようにしてくださいました。バナナ、いちごは株分け、植え替えも一緒に経験させていただき、ミニトマトやころたんは実が熟したらスタッフに振る舞ってくださいました。とっても甘く、美味しくいただきました。お散歩に来られた他の患者さまの中にも楽しみにされている方もおられ、癒しのひとときをくださいました。

Ｊさんはこの他にも DVD がお好きでお部屋のパソコンで映画のタイトルをリストアップされ、DVD の貸し出しもしてくださいました。ご自分の趣味を楽しみながら、私たちスタッフにも楽しみを分けてくださってとても感謝しています。

コロナ禍がまだまだ収まらず、ご家族や大切な人に自由に会えない、外出・外泊が自由にできず、患者さま・ご家族にはいつも心苦しい思いで関わらせていただいています。その中でＪさんのようにご自分の趣味を楽しみながら過ごされている姿を見ると私たちには患者さまの趣味を引き出し、一緒に楽しみを見つける手助けができるということを一つ学ばせていただいた気がします。

これからも私たちにできることを考え、患者さま・ご家族にとって大切な時間が送れるようにお手伝いしていきたいです。

鳳梨（ほうり）君

ご自身で作られたいちごの育て方についてのスライド。奥様がラミネートされました。

植え替えしたバナナ

ころたんとっても甘かったです♡

対談企画

患者もスタッフも一つのチームに

次のような患者さまの言葉がきっかけとなり、スタッフで対談を行いました。「患者が治療のことなんかを決定するときに、お医者さんとか看護師さんだけじゃなくてチャプレンとか他の視点を持った人がいたらいいと思うけど、どう？　ぜひ検討してほしい。せっかく素晴らしいスタッフがたくさんいるのに、今はまだバラバラで、もったいない。」　今回は、前号からの続きを掲載いたします。

皆が輪になって話をしている関係ではなくて、医師対患者になっているかもしれない。

坪田　例えば、ＩＣ（インフォームドコンセント）という言葉があります。よく、「説明と同意」と訳されます。説明を受けた患者さんが、治療方法に同意する。これがＩＣです。

佐々木　なるほど。そのＩＣの場というのは、患者さんがいろいろな専門スタッフに意見を聞いてみてじっくり考えるような場ではないのでしょうか。

坪田　現状のＩＣというのは、皆が輪になって話をしている関係ではなくて、医師対患者って言ったら極端な言い方かもしれないけど、医師の専門性を患者さんに送信する、一方通行の関係になっているかもしれない。

佐々木　今でも、ほとんど全ての職種が一カ所に集まって話し合いをする場（カンファレンス）があります。そのカンファレンスに患者さんも加わって、医療側、患者側という壁を取り払って、話し合えたら、より良いのでしょうか。

坪田　患者さんの限界を僕ら自身がまだ見極められていない。かつては、病状を患者さんに全く説明しなかった。がんという病名すら伝えていなかったけど、今は伝えるようになってきた。この３０年でも大きく変わってきたんだけど。この先どういう時代になってくるのかというのはまだ見えてないと思う。

生きることはどういうことかってずばり聞かれて。

稲田　チャプレンはこの対談のきっかけになった患者さんとは、普段どんな話をしていたんですか。

佐々木　その患者さんと話していたのは、病状のことではなくて、生きるとはどういうことかとか。人が成長していくとは、どういうことかとか。そういうことを話していました。

稲田　確かに、その患者さん自身は、「生きるって何だろう」ということを常に考えていましたね。私も、チャプレンとその患者さんの三人でいたときに、生きることはどういうことかってずばり聞かれて。私は、人間にはいろんな苦しみや悲しみや喜びがあるけど、こうやって患者さんをマッサージしながら気持ちよかったって言ってもらう、そんなことが自分の生きがいになっているって答えたんです。

稲田　ところで、皆さんの、生きがいってなんですか。生きる糧、生きる原動力は何ですか。

篠﨑　人との関わり、大事な人、そういう人がいるから頑張れる。

吉井　楽しみがあると嫌なことも頑張ろうと思える。でも、これが生きる原動力っていうのが思いつかない。今の私にとって生きるということが当たり前だから。

坪田信三 医師
佐々木真理 チャプレン
稲田光男 看護師
篠﨑玲奈 看護師
吉井也実 看護師

坪田　患者さんにとっての生きるっていうことは、繊細な問題で、僕らはなかなか踏み込むことのできない問題。その前に、これは自分たちにとって大事な問題ではないかな。その人をどう見るかということは、自分自身をどう見ているかが大切になるから。いつも問われているような気がする。生きることはどういうことかと。

稲田　末期の患者さんのケアをする中で、やっぱり自分と向き合っている。

その人らしさを大切にしていくにはどうしたらいいかっていうのが根底なのかも

佐々木　この患者さんは、周りの人のことをすごく喜んでおられました。例えば、これからの稲田さんの歩みを楽しみにしていましたし、ベテル病院の将来のことを楽しみにしていました。この患者さんにとっては、やっぱり人との関わりが生き甲斐、生きる原動力だったのではないかと思います。そういう方だったから、自分の死が近づいてきた時期に一対一で対話するだけではなくて、こんなに素晴らしい人たちが周りにいるんだったら何人かで一緒になって、深く話す時間が欲しいなって思ったのだろうと思います。そういうニーズを持っている人は珍しいんでしょうか。

坪田　時々いらっしゃいます。ベテルでの人間の関わり方に温かさを実感して、この患者さんほど表現される方は少ないかもしれないけど、決して珍しいわけではなくて、こういうケアをもっと広めてほしい、深めてほしいという宿題は時々いただいています。それと、確かに、２人で会話するのと、３人で会話するのでもまた違う反応が生まれてくる。人数に限界はあると思うが。

稲田　あの場面でチャプレンと３人じゃなかったらこんな深い話にはならなかった気がする。これをどんなふうにしたら今後のホスピスに活かしていけるんでしょうか。

坪田　その人らしさを大切にしていくにはどうしたらいいかっていうのが根底なのかもしれない。今回の患者さんはこういう人であったわけで。この患者さんらしさを大切にしてケアをした。

篠﨑　自分が変わっていく過程、病状が進んでいく過程も含めて今の時間が嫌じゃない、楽しんでいるって言われていた患者さんがいました。その方も、今回の患者さんも、マイナスにだけ捉えているのではなく、今できることとか、人との関わりを大事にされているのかなと思いました。

佐々木　そういう患者さんがいたときに、何人かで集まって患者さんと深い話をしたら良い時間になるのかもしれませんね。私もこれからは、そんな患者さんがいたら、担当の看護師に声をかけて、一緒にゆっくりと深い話をする場をもってみませんかという声掛けすることができそうです。

最後まで記事を読んでくださり、ありがとうございました。それぞれの患者さまにとっての「生きるとは何か」を大切してケアに取り組むこと。それは簡単なことではありませんが、松山ベテル病院のスタッフは、諦めずに取り組もうとしていると感じました。大切なことに気付かせてくださった、たくさんの患者さまとの出会いに感謝しつつ、連載を終わります。

ボランティア募集しています！

病室へのティーサービスにご奉仕くださる方、病棟のお花やベランダの園芸のお世話をしてくださる方、こもれびの森のお手伝いをしてくださる方、チャペルでのレクリエーションにご協力くださる方等々。
※心身ともに健康な方で、定期的・継続的に活動いただける方の問い合わせをお待ちしております。

TEL：(089) 925－5000　FAX：(089) 925－5599
E-mail：volunteer@bethel.or.jp
（ボランティア委員会　担当：森）

ホスピス献金をお願いします!!

ホスピス献金は、緩和ケア病棟等の援助など、聖愛会の諸活動の援助の為に聖愛会に寄付としていただいています。
皆さま方の温かいご支援をお願い申し上げます。

★現金送金★
〒790－0833　松山市祝谷 6 丁目 1229 番地
松山ベテル後援会（松山ベテル病院内）
★郵便振替口座★
口座番号：01610－2－25364　名義：松山ベテル後援会
※「ホスピス献金」として献げる旨と「金額」をご記入ください。

今年もコロナが落ち着かず、面会制限にご協力いただきありがとうございます。
コロナ禍でも今年は病棟のイベントを開催でき、新しい緩和ケアのあり方を考える機会になったと思います。今後も患者さま、ご家族が一日一日を穏やかに過ごせるようなケアを提供していきたいと思います。

和田　太田　二宮